

学校教育目標を具現化する次世代の研究モデルの提案

～事実解釈型を導入した事後研特化型研究スタイルへの移行～

大分市立大在東小学校

教諭 高野誠太郎

はじめに

昨年度に開校した大在東小学校は、地域の特色を生かした総合的な学習を実践していくための土台作りとして、開校当初より校内研究を進めている。一年目の研究内容は、こどもの探究意欲を引き出すための地域教材の発見、地域講師との連携、教育課程の編成などを中心であった。私は、一昨年度(佐伯市立八幡小学校)、昨年度(大分市立大在東小学校)、そして今年と、研究主任として校内研究を試行錯誤しながら運営してきたが、学校教育目標の具現化について、難しさを感じていた。また、指導案審議等でベテラン教員と若手教員の経験値の違いにより、同じ土台で議論ができていない研修の様子から、自分の研究運営について、見直す必要があると感じた。

1. 主題設定の理由

大分市教育委員会が実施した「令和7年度総合的な学習の時間の充実に関する説明動画視聴アンケート」結果によると以下の結果(大分市全体)が明らかとなった。



どの質問項目においても肯定評価を選択した教員が90%であったが、結果5と結果6については、否定評価を選択した教員が8～9%出ている。また、各質問項目における肯定評価の内訳を分析する

と、結果1～4については、どの項目も一番高い肯定評価を選択した教員が50%以上であったことに
 対し、結果5～6については、一番高い肯定評価を選択した教員が両項目とも40%を下回る。この結
 果は、講習を受けた理解度を問われる質問に対して一番高い評価をつけやすく、自身の実践に対しては
 一番高い評価をつけにくいという心理的な要因によるものだと考えられる。しかし、質問5～6の「思
 う」が40%を下回った要因は他にもあるのではないだろうか。例えば「学校教育目標」や「他教科と
 の関連」と問われた際に、「自身の実践が本当に教育目標に沿っていたのか」「もっと上手くできたは
 ず」「客観的な評価が欲しい」などの不安や迷いなどである。そこで、学校教育目標の具現化が目的の
 一つである校内研究の在り方に着眼し、見直していく必要があると感じた。

また、令和7年9月5日に開かれた中央教育審議会教育課程企画特別部会では、2030年度以降の
 新学習指導要領の実施体制を見据えた話し合いが行われ、今後の検討内容としてまとめられた論点整
 理(素案)が公開された。第三章(27p)によると、「どの学校でも、多様な個性や特性を有する子供が
 在籍している実態が顕在化。多様性を包摂し、一人一人の意欲を高め、可能性を開花させる教育の実現
 が喫緊の課題」と明示されており、そのために調整授業時数制度の導入も検討内容に入っている。

つまり、これからの学校教育は、学校教育目標を念頭に置きながら、その学校に在籍する多様な児童
 一人一人に個別最適な学びやそのための時間を学校裁量で弾力的かつ柔軟に提供していく必要がある
 ということである。学校教育目標の達成や各教科で習得させる資質・能力、個の学びの習得などの責任
 が現場の教員に委ねられるという時代の中で、教員一人一人が「学校教育目標を念頭に置いた実践がで
 きている」と自負できるような研究モデルを構築したいと考え、本主題を設定した。

2. 研究仮説

校内研究の柱を「学校教育目標をどう捉えるか」「児童のアクションをどう捉えるか」の二点に焦
 点化し、授業後の具体的な事実解釈を主軸とする研究モデルに転換すれば、本校の教員は自身の教育
 実践が学校教育目標に沿っていると自認し、建設的に捉えることができるであろう。

3. 研究内容・方法

	時期	研究内容	研究方法
(1)	6月 上旬	事前意識調査を行 う。	「令和7年度 総合的な学習の時間の充実に関する説明動画視聴 後アンケート(大在東小学校)」質問項目5、6の結果を集約し、 学校教育目標を念頭においた自身の総合的な学習の時間の実践に ついて、どの程度肯定的に捉えているか意識調査を行う。
(2)	6月 下旬	本校の設定する新し い研究モデルについ て、研究満足度調査 を行う。	試行授業(5年総合)を研究主任が実施。そこで、事前研、授業観 察方法、事後研の持ち方を提案し、新たな研究モデルを実施し、 実施後アンケート調査を行う。アンケート回答方法は、研究モデ ルに関する事後研の進め方や指導案の様式について、「率直な意 見」「やってみて感じたこと」を記入するとともに、満足度を数 値で選択する形式。
(3)	10月 中旬	事実解釈型研究メ ソッドの定着度調査を行 う。	全体研として、6年の総合的な学習の時間の授業を行い、その事 後研の教員の取り組みや、教員の記入シートから事実解釈型の定 着状況を分析する。

	時期	研究内容	研究方法
(4)	11月中旬	事後意識調査を行う。	6月に実施した「令和7年度 総合的な学習の時間の充実に関する説明動画視聴後アンケート(大在東小学校)」と同様のアンケート調査を行い、本校教員の意識調査を行う。加えて、事後研の実施状況とアンケート調査の結果を相関的に分析し、数値の変化の要因を明らかにする。

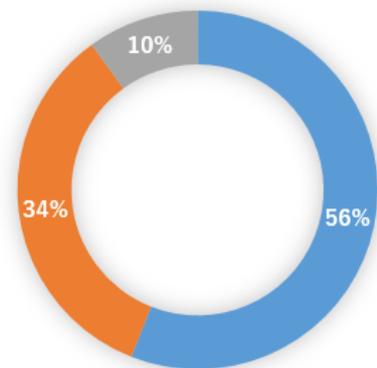
4. 研究の実際と考察

(1) 事前意識調査結果

アンケート結果1

「自校の総合的な学習の時間は、学校教育目標に掲げる育成したい資質・能力が発揮される時間となっていると思いますか。」

学校教育目標を意識した自身の総合的な学習の時間の実践を肯定的に捉える割合は、90%であった。本校は、昨年度開校した新設校ということもあり、令和6年度の校内研究は、地域教材の発掘や年間計画の編成を中心に進めてきた。本校の教育目標を具現化していくための教育課程編成や協議を行ってきたため、肯定的な回答を選択した教員の割合が多かったのではないかと推測する。今年度活用する研究モデルにより、否定的な評価を選択した10%の教員や「やや思う」を選択した34%の教員にどのように影響するのかについて、検証していきたい。



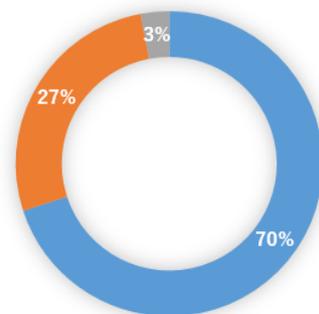
■ 思う ■ やや思う ■ あまり思わない ■ 思わない

大在東小教員の回答結果(令和7年6～7月)

アンケート結果2

「自校の総合的な学習の時間は、他教科等との関連性が意識されたものとなっていると思いますか。」

他教科との関連を意識した自身の総合的な学習の時間の実践を肯定的に捉える割合は、97%であった。今年度は、校内研究で活用する研究モデルの中に他教科との関連を踏まえた指導略案を使用する予定である。研究実践を通して、否定的な評価を選択した3%の教員や「やや思う」を選択した27%の教員にどのように影響するのかについて、検証していきたい。



■ 思う ■ やや思う ■ あまり思わない ■ 思わない

大在東小教員の回答結果(令和7年6～7月)

(2) 試行授業を題材として(試験的に)行った新しい研究モデルへの満足度調査と考察

○仮説を検証するための実践

今年度実施予定の研究モデルを理解してもらうために、6月に事前共有会、提案授業、事後研を設定した。6月11日(水)に行った事前共有会では、下記の内容を説明した。

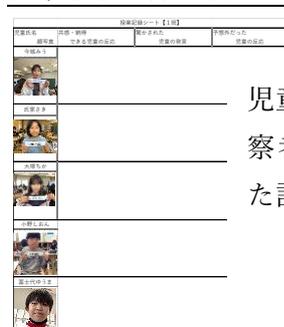
	目的	具体的な手順
事前共有	これまでの探究活動、本時の流れ、今後の展開について、共通理解すること。	授業者は、本校の設定する略案を作成し、これまでの探究活動がイメージできる写真を使いながらプレゼン形式で説明する。
授業観察	事実を記録すること。 誰がどのような発言、反応、行動をしたのか、事実をありのまま記入する。	授業は、6班構成の話し合い活動を中心とした授業を設定し、学年部ごとに、観察する班を指定し、担当する班の発言や反応、行動をありのまま「記入シート」に記入する。事実は児童の発言すべてを記録する必要はなく、「共感・納得できる児童の反応」「驚かされた児童の反応」「予想外だった児童の反応」など、観察者の主観で記録する事実を選択する。
事後研	印象に残った事実をについて、その要因を複数の教員の解釈を交えながら、多面的に捉えていくこと。	まず、それぞれ印象に残った事実を紹介する。次に、紹介された複数の事実から、解釈を広げたい事実を選択する。最後に、選択した事実の要因を探る。想定される要因としては、教師の発言、思考ツールの効果、場の設定、他の児童の発言、適切な単元設定などがあること。

※別添資料1：作成した指導略案・・・1ペーパーで事前共有会に必要な情報のみを記載。





※授業観察の際に使用した記録シート



児童名、児童写真、観察者の視点を提示した記録シートを使用。

※事後研で使用したシート

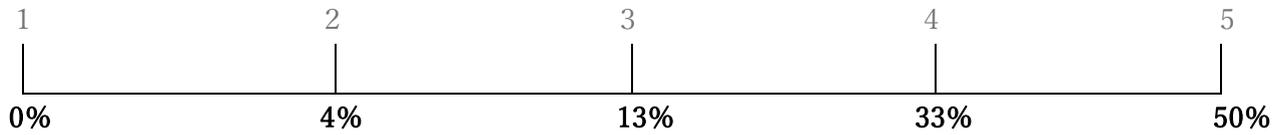
	自立	協働	創造
成果			
課題			

観察者が記録した事実を付箋に書き、学校教育目標の3つの柱のどこに位置付けられるのか分類するために活用した。

○アンケート調査による研究満足度の結果

研究満足度は1～5の数値を選択し、研究モデルについて評価するよう依頼した。また、数値の選択だけでなく、数値を選択した理由、指導略案の形式、事実解釈型を实践してみても感想を記入してもらった結果が下記の通りである。

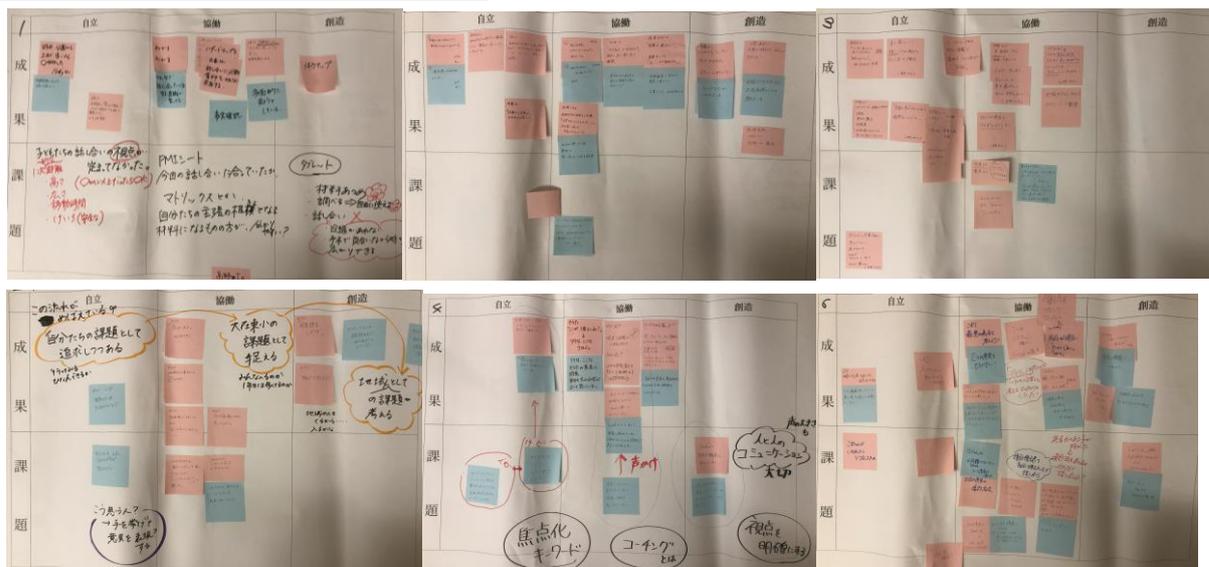
〈 各数値を選択した教員の割合 〉



〈新たな研究モデルを試験的に行ってみた教員の声〉

	否定評価を選択した理由	中間評価を選択した理由	肯定評価を選択した理由
指導略案について	<ul style="list-style-type: none"> 指導略案が簡素化しすぎて、授業の流れがイメージしにくい。 写真や図の活用は、作成者によって苦手意識が出る。 	<ul style="list-style-type: none"> 指導略案は簡素化されて見やすいと感じたが、イメージしにくい部分もあると感じた。 指導案に前時の流れを位置づけるとイメージできる。 	<ul style="list-style-type: none"> 見やすく、作りやすい。 情報が精選されていてよい。 図や写真があると見やすい。 これまでの足跡がある略案に魅力を感じる。
事後研(事実解釈型)について	<ul style="list-style-type: none"> 話し合いの進め方がまだ難しい。 事実の捉え方が思いのほか難しく解釈までなかなかたどりつかなかった。 発信が少ない児童の事実を拾い、解釈していくことが難しい。 反応がほとんどない児童がいた。 手立ての有効性をみるのか、ねらいに沿っているかをみるのか、視点がぶれてしまっていた。 	<ul style="list-style-type: none"> 事実をもとに話し合う方法はよいが、手立ての有効性やねらいに沿っていたかについての話し合いがしにくい。 事後研の進め方は理解できたが、実際にやってみると、まだついていけないところがある。 いろいろな解釈を出し合い、共有するのは楽しかった。 	<ul style="list-style-type: none"> 事実に沿って、成果や課題を出し合うことができた。 新たな試みで楽しみ。 これまでは、教師の手立てや指導の仕方を研究で見えてきたが、児童の反応を見る方が、指導力向上や児童の理解の向上につながると思う。
本研究について	<ul style="list-style-type: none"> コーチング(本校研究の手立て)例を記入しておくとうまいと感じた。 コーチングについて具体的に知りたい。 		<ul style="list-style-type: none"> 研究手立てとして設定するコーチングは、他教科でも活用できるのでよいと思う。
その他	<ul style="list-style-type: none"> 授業記録シートに記入するのが難しかった。 		

○事後研における記入内容についての考察



[水色→成果、ピンク→課題]

事後研終了時に各班の事後研シートを回収し、1 2 3 枚の付箋に記入された内容を分析すると、事実が記入されているものが83%であった。記入内容としては、「全員に避難場所がおなじでよいか確認する」「月の船が避難場所がいいんじゃない。みんな意見があっているから PMI シートにまとめようよ」など、児童の発言を事実として付箋に記録していた。また、「B 児の意見にうなずき、表にメリットをまとめていた」など、児童の反応や行動が記入されている付箋も見られた。しかし、残り17%の付箋には、「みんなで話し合っただけよとする姿勢が育っている」「多面的に見ることができている」など、見た事実ではなく解釈が記入されていた。

○アンケート結果と事後研シートの活用の実態とを照らし合わせた考察

【指導略案について】

指導略案については、「情報が精選されていて見やすい」「授業の流れがイメージしにくい」など、賛否両論が出た。しかし、事前共有会では、本時と同じ活動を教員が実際にやってみることで、授業の流れをつかめた人がほとんどであった。また、事前共有会の目的である3つの内容は共通理解できていたことから、略案の形式は引き続き活用していくことができると考える。

【事後研(事実解釈型)の進め方について】

解釈が記入されている付箋が17%あったことから、付箋の活用の仕方や事実の受け取り方について再検討していく必要があると考える。また、「授業記入シートに記入するのが難しかった」という意見を研修部会で相談したところ、「授業45分の中ですべての事実を記入すると記入する量が膨大になってしまう」という意見が出されたので、授業の記録シートや記録内容も検討していく必要があると考える。

【本校の研究手立てであるコーチングについて】

「コーチングの具体例が知りたい」という意見から、本校教育目標にせまるコーチングの目的とその具体例も共通理解していく手立てが必要であると考えます。

(3) 改良した研究モデルによる事後研の様子とアンケート結果を照らし合わせた考察

○ 試行授業を題材とした、授業観察方法と事後研の改良について

① 記録方法の改良

本校の教員から、「授業の中のこどもの事実の量が多すぎて記入が難しい」という声が挙がった。そこで、事後研で必要となる情報を精選し、観察者が何を記入すればよいのか見直した。その結果、事後研で必要となる情報を下記の3つに絞ることができた。

- ・ 研究対象児の発言や反応、行動+時刻
- ・ 研究対象児と関わった同じグループ内の児童の発言+時刻
- ・ 教師の発言+時刻

この情報を45分の中で収集するために、各グループに配置する職員の役割分担を行った。

[10月に実施する授業研のための各グループ観察チームとその役割]

	対象児 A	対象児 B	対象児 C	対象児 D	対象児 E	対象児 F
役割 A	高野☆ 阿部	甲斐や☆	甲斐り☆	森脇☆	大木☆ 三浦	足立☆
役割 B	佐藤ま 徳丸	田中 今村	尾立 近藤	和田 南	安部 松下	佐藤ゆ 太田
役割 C	渡邊 教頭	下郡 山本	勝尾 吉田	矢野 後藤	内田 教頭	菅野 校長

役割 A・・・教師のコーチング記録(自分の担当する班に教師が来た際の発言&反応)+時刻

役割 B・・・研究対象児と関わる班のメンバーの発言を記録+時刻

役割 C・・・研究対象児の行動、反応、発言、記述内容の記録+時刻

☆グループリーダー(研修部員)

② 記録シートの改良

[記入例]

全教員に、下図の記録シートを配布し、自分の担当する事実の記入を依頼した。

9:20~9:30	9:30
活動の流れ 「今日は班のメンバーで話し合っ て、大在地区は誰もが過ごしやすい のかどうか考えましょう」 9:20	〔役割 A の場合〕 ・ 教師の発言をそのまま記録する。記録の時間がない場合は、キーワードのみ記入。 ・ 教師の発言の時刻を記入する。 〔役割 B の場合〕 ・ B については、班員すべての発言を記録する必要はない。 ・ 対象児からの発言に対する反応や発言、対象児の反応が見られた場合の他児童の発言とその時刻を記録する。 〔役割 C の場合〕 ・ 研究対象児童の発言や反応、ワークシート等への記入内容とその時刻を記録する。反応の記録には、「うなづく」「首をかしげる」「笑顔になる」など、状態が分かるように記入する。
思考ツールの使い方説明 「自分の考えを付箋に書いて貼 りましょう」 「貼る時には、理由や根拠もしゃべ れるように準備をしておいてくだ さい」 9:24	

※事後研では、授業で見られた児童の事実が学校教育目標のどの項目に位置付けられるのか判断できるよう、小学校学習指導要領(平成29年告示)総合的な学習の時間編の内容と学校教育目標である「自立」「協働」「創造」の観点を照らし合わせ、具体的な姿を提示した。また、アンケートに記入されていた「コーチングについて具体的に知りたい」という声も挙がっていたため、RIAS分析方法を活用し、教師の発言がどのカテゴリーに位置し、各カテゴリーが児童の探究意欲にどのように影響したのかについて解釈できるようにした。

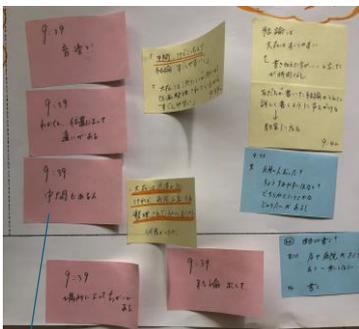
RIAS 分析とは

医療者と患者との会話の相互作用を分析する代表的な方法のひとつに、米国ジョンス・ホプキンス大学の Roter の相互作用分析システム (RIAS: Roter Interaction Analysis System、1991)がある¹⁵⁾。このRIASは、医療場面で患者と医療者が、どのように影響し合い、患者の受診・受療が進められていくのかということ、その相互作用の典型的なパターンについて言語コミュニケーションの面から追究する評価法である。

〈教師によるコーチングのカテゴリー〉

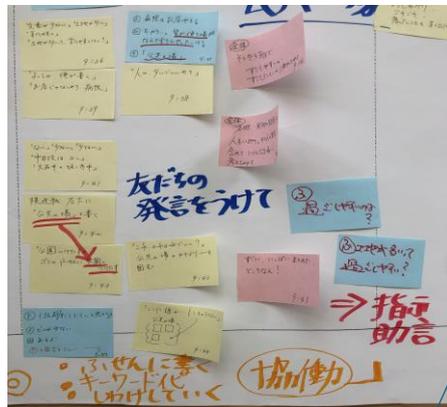
- ①質問・・・現状や考えを聞く
- ②情報提供・・・探究活動に必要な情報を与える
- ③指示/助言・・・特定の行動を促す
- ④同意/励まし・・・こどもの発言を肯定し、支持する
- ⑤共感/安心・・・こどもの感情に寄り添い、安心させる
- ⑥同意/協力・・・周りに同意を求める
- ⑦自己開示・・・教師の経験を話す
- ⑧ユーモア・・・緊張を和らげる
- ⑨沈黙・・・会話の中断

○事後研における教師の記入内容や審議の様子



[付箋に記録された内容]

・役割を分担し、事実の文字起こしを依頼した結果、事後研シートに貼られた付箋の枚数は、248枚であった。また、付箋に記入された情報のすべてに事実(発言や反応)+時刻が記入されていた。



[研究対象児の事実の捉え方]

・研究対象児の発言や反応、行動と同グループ内の児童の発言や教師のコーチングにどのような相関関係があったのかについて議論されていた。



[教育目標の解釈の仕方]

・研究対象児童の行動が学校教育目標「自立」「協働」「創造」のどのカテゴリーにあたるのかについての議論も見られた。



(4) 全教員に依頼したアンケート調査の結果

○研究満足度調査結果

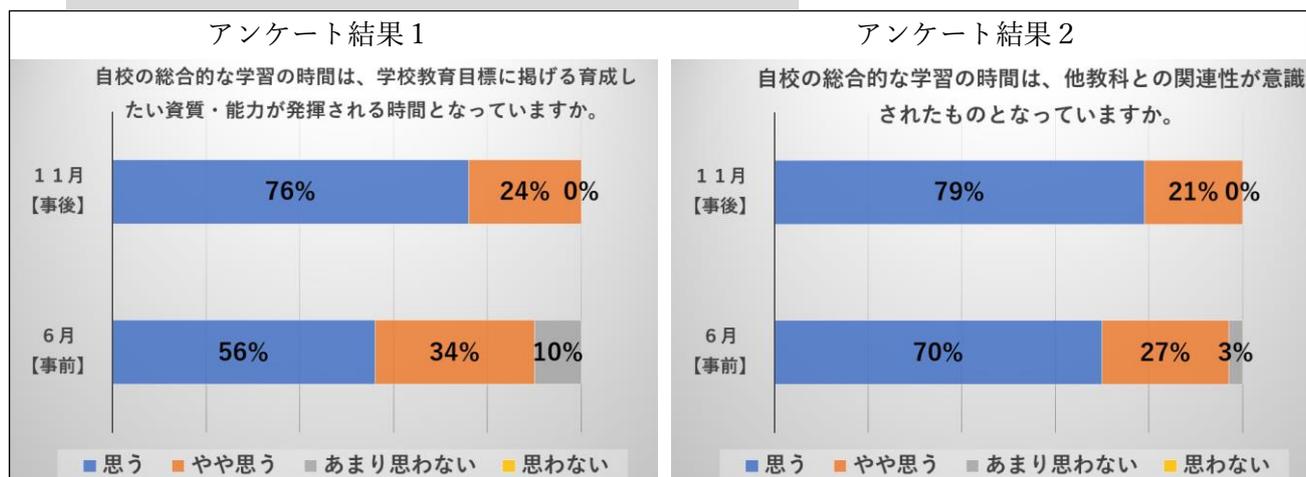
〈 各数値を選択した教員の割合 〉



○アンケート記述内容

	研究モデルに対する疑問や課題	肯定評価の理由
授業記録	<ul style="list-style-type: none"> 研究対象児童の発言が2つしかなく、2つだけを迫って解釈するだけでよいかについては、疑問が残る。 	<ul style="list-style-type: none"> 見取る児童が限定されていたので、無駄なく記録することができた。 こどもの様子を全教員が観察、メモして授業研に臨む姿が見られた。
事後研(事実解釈型)の進め方	<ul style="list-style-type: none"> 改善点などに焦点を当てた形ではないので、ブラッシュアップという視点では、難しいところがある。 総合であれば、この進め方でよいが、国語や算数であれば、仮説検証型の方がよいのではないかと感じた。 事実が多くなる分、議論(解釈)の時間が足りなくなっていた。 板書や思考ツールの効果や検証も考えていきたいが、詰込みすぎると大変になる。 	<ul style="list-style-type: none"> 話し合う人(教員)たちが同じ土台で話すことができていた。 役割でこどもの事実を記録し、すり合わせることで、こどもの思考が分かりやすかった。 同じこどもの発言に対して、いくつもの解釈があり、こどもを見る視点が広がった。 みんなで話し合いながら考察できるので良かった。 みんなで参加できる仕組みであった。 こどもに焦点を当てて授業者との関わりを見ることができた。 自分は事実だけを見ればよく、解釈はみんなでできたので、深まりがあった。
その他	<ul style="list-style-type: none"> 授業を受ける児童は、教師にべったり張り付かれた状態であったから、本領発揮できなかったのではないかと。 総合そのものの理論研究や各学年の指導の組み方、縦との繋がり、そのために必要な教科でどう育てていくのかも議論する必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> 事後研の質が回数を経るごとに上がっている。 今回の進め方は、授業をしない側も自分事として考えられたと思う。 今回の授業研で、教職員にこの研究スタイルが定着できたと思う。 授業研を通して、コーチングの内容が具体的に分かった。

○学校教育目標や他教科に関する事前調査と事後調査の比較



事後アンケート実施日 2025. 11. 7

○各アンケート結果をもとにした考察

アンケート結果①については、一番高い肯定評価を選択した教員の割合が20%増え、否定評価を選択した教員の割合は0%と、向上が見られた。また、研究満足度調査も、肯定評価を選択した教員の割合が6月は88%であったことに対し、11月は90%と少しであるが向上が見られた。これは、6月は、研究への満足度は高かったにも関わらず、学校教育目標を念頭に置いた自身の総合的な学習の実践を肯定的に捉えることができない教員が数名いたという捉え方ができる。しかし、11月は、研究満足度とアンケート結果①が、双方とも高い数値を出している。このことから、本研究手立てが有効であったのではないかと考える。校内研修の時間に、「学校教育目標をどう捉えるか」「児童のアクションをどう捉えるか」について、事実をもとに複数の教員で解釈していく本研究モデルを使ったことで、学校教育目標とその具体的な児童の姿を一人一人が思い描くことができたのではないかと考える。

アンケート結果②については、11月は100%の教員が肯定評価を選択した。また、一番高い肯定評価を選択した教員の割合が6月と比較し、9%増えていた。このような向上の要因として考えられることは、本研究モデルで使用した指導略案が要因の一つではないかと考えられる。指導略案には、他教科との関連を位置付けるようにしている。6月の試行授業や10月の授業実践で設定した事前共有会では、「これまでの総合的な学習の時間と他教科をどのように関連させてきたか」についても説明を行った。このように実践内容を共有したことで、他教科との関連への意識の高まりや理解の深まりが生まれたのではないかと考える。また、本研究内容には位置付けていないが、本校の校内研究構想の中に他教科との関連を柱の一つに位置付けていた。大分市の「書く力の育成」に向けた取り組みと本校の柱である他教科との関連を兼ねて、9月に国語科の授業も全体研で扱っている。授業の内容は、総合的な学習の時間の探究活動(まとめ・表現)を推進するための書くスキル習得として、言語活動を設定したものであった。実際に総合的な学習の時間で収集した情報を使い、授業実践を行ったため、他教科との関連の見通しが立ったことも要因の一つではないかと考えられる。

5. 研究の成果と課題

(1) 成果・・・本研究における成果は、下記の3つである。

①事後アンケート項目2、3において、教員100%が肯定評価を選択したこと。

このことから、全ての教員が総合的な学習の時間を進めていく上で、学校教育目標や他教科との関連を意識することができるようになったのではないかと考える。自身の実践を肯定的に捉えることができるようになったり、自校の研究の取り組みから肯定的に捉えることができるようになったりと、回答者によって選択理由は異なると推測される。しかし、いずれにしても総合的な学習の時間を実践していく上で、学校教育目標や他教科を関連させることの重要性を、校内研究を通して共通理解できたのではないかと考える。

②本研究モデル(事実解釈型)の運営方法を構築することができたこと。

事後研で事実をもとに解釈を広げるための教員の観察方法や記録方法、事後研シート、事後研の話し合いの進め方など、改良を重ねながら、構築することができた。来年度も本研究モデルを活用し、学校教育目標の具現化や児童の分析を行い、教員一丸となって学びを深めていきたい。

③総合的な学習の時間の授業分析には、事実解釈型が適していることが明らかとなったこと。

総合的な学習の時間では、児童の疑問や困り、探究意欲に応じた教師による柔軟なコーチングが大切だと考える。仮説検証型で観察や分析を行うと、手立てを講じた場面での児童の様子に限定され、児童のアクションの要因を多面的に捉えることができなくなってしまう。その点、事実解釈型で観察や分析を行うと、何気ない事実が意外と児童の探究意欲を引き出していたことに気付くことができると考える。

(2) 課題・・・本研究における課題は、下記の2つである。

①事実解釈型の研究の不安定性が明らかとなったこと。

研究満足度アンケート調査結果から、発言や反応の少ない児童の分析が難しいという声が挙がってきた。研究対象児童は、積極的な発言が予想される児童を選択していたが、事実を記録するために対象児童に密着する環境が、児童の自由な発言や反応を抑制させてしまう場合もあることが明らかとなった。そのため、音声録音や動画撮影を活用するなど、記録方法を見直していく必要がある。

②手立ての効果検証の時間が確保できないこと。

研究満足度アンケート調査結果から、思考ツールや板書の効果などについても議論していく必要があるという声が上がったため、目的に応じた研究を一年間の中で、設定していく必要がある。

6. 研究のまとめ

令和7年9月5日中央教育審議会教育課程企画特別部会の論点整理によると、次期学習指導要領全面実施にあたり、調整授業時数制度の導入も検討されている。標準授業時数の弾力化と時数精選により、教師とこどもの双方に余白の時間を創出し、教育の質を校内研究・研修により高めていくことをねらいとしている。

これからの校内研究は、教科研究や教師の手立て以外にも、探究活動と情報活用の連携、個々の児童生徒の個性や特性に応じた学びの時間など、多岐にわたる分野で学校教育目標の具現化に向けた校内研究を推進していく必要がある。そのような中、より実践的で、議論のしやすい研究モデルとして、本研究モデルを提案したい。今後も研究参加者の声を吸い上げながら、改良、実践していきたい。